中等部・初等部

中等部 3 年生が初等部 6 年生へ広島研修旅行の学びを伝える

竹上尚子　清水夏希

今年度、中等部 3 年生が広島研修旅行の学びを初等部 6 年生に話し伝えるという時間をもつことができた。各部で実施していた平和に関する学びのプログラムとして、中等部 3 年生は例年通り広島研修旅行へ行くことが計画されていた。また初等部 6 年生は特別授業として武蔵野けやき会の松田隆夫氏から原爆のお話を伺う時間が計画されていた。

今回の計画は、6 年生が実施した松田氏による特別授業に、中3の学習係と教員が同席させてもらったことがきっかけであった。その折に、初等部の先生から「広島の研修旅行から帰ったらぜひ 6 年生にも様子を話してくださいね」とお声かけいただき、そのひと言が生徒のモチベーションとなり、「伝える」ことへの使命感に変化し、かねてより願っていた学びのアウトプットが実現した。

Ⅰ.中等部 3 年生と広島

1. 中等部 3 年生が 6 年生に話すことになるまでの経緯

9 月 10 日(水)、広島研修旅行の準備期間に学習係に決まった 3 名と教員 2 名で、初等部の特別授業に出席した。経緯としては、初等部の清水先生が武蔵野けやき会の松田隆夫先生をお招きして5, 6年生に向けた特別授業をしていただくことになり、資料室の村上さんを通じて中等部にもお知らせいただいた。

武蔵野けやき会の松田隆夫氏は、広島で胎内被爆し、その後東京で武蔵野市に住んでいる被爆者の会(武蔵野けやき会)を結成、地域で幅広く活動されている方である。

特別授業の中で、松田氏は自分は胎内被爆で原爆の記憶がない、だから君たちと一緒に勉強しよう、と語りかけ、「広島市民の絵」を児童たちが手に取って見られる形でお話をされた。その時、初等部の児童が集中して話を聞き、質問にもよく答えている様子から、事前学習でしっかり学んできた様子が伺えた。中 3 の係の生徒たちもその雰囲気から、何かを感じとったのではないかと思われる。

会場を後にする際に生徒は、6 年担任の清水先生に「今日は来てくれてありがとう。広島の研修旅行から帰ったらぜひ 6 年生にも様子を話してくださいね」と声をかけていただき、このつながりを活かせたら中 3 の事後学習できっと良い学びになるだろうという感触を持った。

広島研修旅行(10/23～25)を終えた 11 月、学習の係は初等部へ話をしに行くことを覚えており、それが事後学習のモチベーションとなって日程や時間などを具体的に相談する運びとなった。初等部の子どもたちへ伝えたいことは何だろう？と考え、内容構成・スライド・報告文を作成した。

12 月 19 日(金)1 時間目に 6 年教室へ行き、「6 年生に広島を伝える」というテーマで、発表をし、質疑応答の時間を持つことができた。

2. 6 年生に伝えた内容

【内容構成】

「6 年生に広島を伝える」

①広島研修旅行 3 日間の行程

②本川小学校と語り部のお話について

③本川小学校で印象に残った話の紹介と感想

④大久野島とその学びと行ってみて思ったこと

⑤平和記念公園と戦前の中島地区

⑥中澤さんのお話

⑦まとめと感想

3. 何を中心に伝えるか？の話し合い

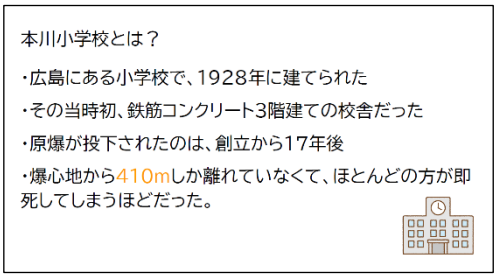
研修旅行を終えた 11 月、記憶が新しいうちに学習の係と内容を決めるためのミーティングをとった。

中 3 が学年で行ってきた事前学習はいくつかあり、大久野島の毒ガス製造と、その毒ガスをアジアの侵略に使用した加害の歴史、また広島原爆の被害の歴史、平和記念公園内の慰霊碑のこと、多くの戦跡の話など、自分たちで調べ学習をしたうえで、実地で見聞してきたこともいろいろあった。彼らが伝えたいことは山ほどあったが、20 分間という

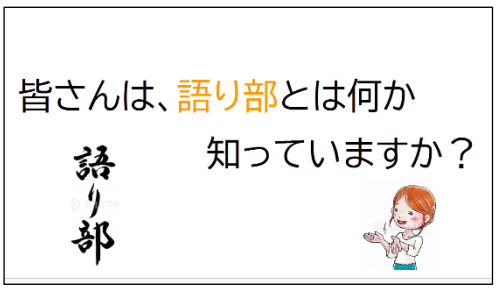
短い中で、「何を伝えたいのか」について意見交換を行った。
・加害の歴史にも目を向けて、と伝えたい。
・浅くではなく、係自身が深く心に残ったことを伝えたい。
・感想を伝えたいが、ある程度は説明も必要。
・スライドでわかりやすい内容にしたい。
などの意見が出され、それぞれの心に深く残ったことが何であるかについて聞き合うことができた。

さらに、「生徒たちが感じた生の声を聞かせてほしい」という清水先生からのオーダーも、内容構成の決め手となり、自分たちの発表の方向性が定まっていった。

最後の関門は、小学生（自分たちより年下）に、伝えたい内容が果たして伝わるのか、という表現上の見直しだった。スライド上で分かりにくい言葉には説明を入れたり、読めない漢字にはフリガナをふるなど、工夫する姿が見られた。



Ⅰ-3　①言葉を簡潔に説明（スライドより）



Ⅰ-3　②問いかける場面の工夫（スライドより）



Ⅰ-3　③地図を活用・言葉の説明（スライドより）



Ⅰ-3　④伝えたい言葉だけを表示（スライドより）

4. 当日の発表

12 月 19 日（金）の 1 時間目、中 3 の発表者 5 名と共に 6 年教室に向かった。緊張していた様子だったが、6 年生の児童の前に立つと、不思議とお兄さんお姉さんの表情へ変化し、語りかけるように発表が進んでいった。練習時には活舌が悪くて聞き取れなかった言葉や、声が小さいと何度も言い直したところも難なく乗り越えられた。集中して聞いている人たちの空気に助けられて、最後まで「伝える」ことができた。印象に残っている大久野島ガイド山内正之さんの言葉、「私たちには伝える責任がある」。子どもの本作家の中澤晶子さんの言葉「今日の聞き手は明日の語り手」を胸に話を続け、これらの言葉は彼らが伝えたかったことの核になっているということが分かった。

5. 中等部 3 年生徒の感想

・今回、広島の現地へ足を運んだからこそ、感じ学んだ事が、平和を考える為に大切な意味のある事だと私は感じ、それを小学生へ向けて伝えたい思いでアウトプットをすることができたと思います。

特に報告の作成は時間が限られていた中、どのように自分の中にあるものを年齢の離れた小学生達へ分かりやすく伝えられるか悩み、言葉を噛み砕いて話す時の大変さに直面しました。本当に相手が何を感じるのか、いくら噛み砕いたとしても生の声は届くのか、自分にとって不安な、そして不思議な気持ちでした。

当日、話す中で足りない部分はあったかもしれませんが、6 年教室での発表中は、自分にとってすごくかけがえのない平和の空間に感じました。

6 年生が書いた感想を読み、私達の話を最後まで集中を切らさず聞いてくれたこと、また様々な平和につ

いて、みんながより考えるきっかけを私達が作れていた事を感想から受け取り、私達はその時「明日の語り手」（中澤晶子さんの言葉をおかりして）になれた！と思いました。（H.O）

・小学生に説明するには できる限り短く・分かりやすくする必要があったので、学んだことをもう一度噛み砕いていった。自分自身も学んだことについて色々再確認することができた。

小６は小学校低学年ほど未熟ではなく、中１に近いけれど中学生ではない、といった微妙な距離感で、どう伝えれば分かってもらえるか悩んだ。しかし元々広島のこと（原爆、大久野島など）について知っている子が多かったので、すぐ理解してくれてありがたかった。自分が広島のことを詳しく知ったのは中３になってからなので、小学生のうちから知っておくのは良いことだし、大切だなと思った。

しっかり話を聞いて 多くの質問と感想をくれたこと、彼らが広島に行くときに、この発表が少しでも役に立つのなら、伝えられて良かったなと思った。（A.I）

中等部　竹上記



Ⅰ-4　６年教室で発表する中３の生徒

Ⅱ．初等部６年生の学び

1. 中３に話をしてもらうまでの経緯

戦後 80 年という節目の年。６年の社会科を担当することになり、どのようなことに重点を置いて歴史を学ぶかを考えた時、子どもたち自身が事実を知り、受け止め、戦争について想いを巡らせる経験を大事にしたいと思った。その機会の一つとして、武蔵野けやき会の松田隆夫氏に胎内被爆者としての想いを語っていただく場を設定した。

その他にも、いわゆる教科書や資料集、映像や写真を活用して学ぶことに留まらず、できるだけ直接お話を伺う機会をつくっていきたいという思いから、資料室の方々と何度か相談。中等部３年生が毎年研修旅行先として広島を訪れていることを知り、その中３の生徒数名が松田氏の被爆体験の話を一緒に聞いてくれることになった。ぜひ、松田氏の話を聞いた生徒が広島に行き、どのような想いをもったのか、また何を見聞きしたのか、６年児童に話をしていただきたいと思い、特別授業を依頼。ご快諾いただき、中等部の竹上先生と生徒との打ち合わせを経て、12 月に直接６年に研修旅行の話をしていただけることになった。

教師としては、日頃から初等部生と中高とのつながりをもっともつようにしたい、初等部生が中等部生や高等部生から直接学ぶチャンスをもちたいと願っていた。そのことも叶う、とてもよい機会となった。

2. 当日の６年生の様子

12 月 19 日、お話をしていただくことに決めた日は初等部の大事な行事のひとつ、クリスマスの日だった。６年生は初等部の最高学年としての役割を担うこともあり、その日はいつもより特別な気持ちをもつ児童も多くいた。気持ちを切り替えられるか少々心配もあったが、制服を着ていたこともあってか朝から落ち着いており、クリスマスの準備を一通り終え、何かに気持ちを集中しやすい環境でもあった。

児童は中等部３年生の語る話を、静かに、よく聞いていた。日本が受けた「被害」に留まらず「加害」の話も出てきたこと、自分たちが初等部３年生で飼育したウサギが多く住む島が話題になったことなど、彼らが集中して聞けた要素が話の中にいくつもあった。そして何より、３歳上という、年齢の近いお兄さんお姉さんのような方々が、実際に感じたことを直接教えてくれた状況が児童の興味や関心を高めていたように感じた。

3. 初等部６年児童の感想

・６年生の歴史の勉強で戦争のことは学んでいたけれど、初めて知ったことがたくさんあった。特に、大久野島でウサギが実験台に使われていたことを知ってショックだった。あと、当時使われていたしゃもじなどが、今でも埋まっていることにびっくりした。その他

にも知らないことがたくさんあったけれど、この話を聞いてもっといろいろなことを知りたいと思った。(R.T.)

・私は探求でも戦争について調べているので、もうだいたい知っていることの話かなぁと思っていたら、知らないことばかりでした。例えば、唯一残った本川小学校のこと、大久野島で毒ガスをつくって他の国に投下していたこと、島でしていることがばれてしまわないように島を地図から消していたことなど、びっくりしました。まだまだ知らない話もあるので、もっと聞きたいです。(K.O)

・大久野島のことを初めて知った。大久野島が地図から消されていたことを聞いてびっくりした。広島といえば原爆、という日本の被害の方を連想してしまうけれど、日本は加害者でもあると初めて知った。私は、戦争のことを調べることはいやだなと思っていたけれど、これからは戦争と向き合っていきたいと思った。(Y.H)

初等部　清水記



Ⅱ-2　中等部 3 年生の発表を聞く 6 年児童

Ⅲ. まとめ

今回、初等部 6 年生と中等部 3 年生の縦の連携授業の機会を持つことができ、お互いに影響し合える時間になった。

学びをいったん咀嚼して、アウトプットするプロセスがいかに大切であるかを、学習者と共に伴走している教職員も感じることができた。また、生徒たちが年齢の近い人達に教え、また教えられる関係を築くことができたことに感謝している。

中高連携の試みとしても、ひとつのモデルになり得たのではないだろうか。毎年同じ形ではなくても、お互いの部で、平和についてどのような取り組みをしているか、情報を交換し、アンテナを張って学習のプログラムを構築していければと思う。

竹上記